明治初期の文学思想

下巻

柳田泉

著者略歴

明治二七年青森県弘前市に生まる。
大正七年早稲田大学文学部卒業。
早稲田大学文学部名誉教授・文学博士。

主要著書

『明治文学叢刊』（松柏館）
『随筆明治文学』（春秋社）
『坪内逍遙』（河竹氏共著富山房）
『幸田露伴』（中央公論社）
訳書『カーライル全集』（春秋社）

現住所　三鷹市深大寺三九一四番地

明治文学研究　第六巻
明治初期の文学思想　下巻

著者© 柳田泉（やなぎだいずみ）

著者との協定により検印廃止

¥ 2000

昭和四〇年七月一日　第一刷発行

発行者　神田竜一
東京都千代田区外神田二ノ一八

印刷所　三秀印刷工業株式会社
東京都文京区関口水道町四六

製本所　小林製本所
東京都千代田区神田猿楽町二ノ八

発行所　株式会社　春秋社
東京都千代田区外神田二ノ一八
電話　東京(四)九六一一～五
振替口座・東京　二四八六一

落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

N. D. C. 904

目次

第三部　初期の文学思想（つづき）

第二篇　明治十年以後の文学思想（つづき）……三

3　批評文学の要求……三

（一）「明治日報」の批評文学論……一〇

（二）「絵入自由」の評論論……一六

（三）「絵入自由」の批評の説……一九

（四）坪内逍遙の批評論……二四

4　美の精神―美術の空気・美学思想……三〇

（一）美の精神……三〇

（二）美術復興の空気……三五

（三）美術雑誌の美術論……四五

「臥遊席珍」……四五
「東洋絵画叢誌」……四六
「大日本美術新報」……四七
新井由三郎「美術新論」……五四
（四）美学説の移入……六三
（その一）西周『美妙学説』……六六
（その二）西周訳ヘーヴン『心理学』の美論……七一
（その三）ヘーゲル哲学への理解……八〇
（その四）フェノロサ『美術真説』……八六
（その五）ベイン『心理新説』の想像論……九四
（五）スペンサーの進化哲学と美術思想……一〇〇
（六）中江兆民訳『維氏美学』……一一三
（七）ロシア美学の瞥見——ベリンスキーの美学思想……一二五
5　詩歌思想・詩歌革新……一三四
（一）百科全書『修辞及華文』……一三六
（二）二人のトーマス……一五四
（三）西洋文学知識移入の実例……一六一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

（四）大阪毎日新聞の詩歌論……一七一
（五）キリスト教精神の詩歌理想――同志社の山崎為徳……一七六
（六）植村正久の詩歌改良思想……一八一
（その一）植村正久の詩歌理想……一八三
（その二）再び「文海新潮」について……一九〇
（その三）ホレース詩法論紹介……一九二
（七）詩歌革新・新体詩の創造……一九五
（八）『新体詩抄』・『新体詩歌』……二〇一
（九）『新体詩林』及び『新体詩学必携』……二二四
『新体詩林』……二二四
『新体詩学必携』……二二七
（一〇）高月東海『英漢学論』……二三〇
文学論……二三三
詩歌論……二三四
文章論……二三七
（一一）日原昌造の文学論……二三九
（一二）末松謙澄の「歌楽論」……二四八

（その一）末松謙澄伝……二四九
（その二）歌楽論……二五五
6　小説革新の思想……二六三
（一）小説革新の先駆——服部撫松……二六八
（二）小説排斥論の二、三……二七五
（三）浅野乾の小説有用論……二八一
（四）時代思想の瞥見——小説尊重の大勢……二八四
（五）西洋小説への興味……二八七
（六）二人の啓蒙家……二九五
（七）ヂスレーリとユーゴー……二九八
（八）「民権ヲ拡張スルノ方法」……三〇〇
（九）中島勝義の小説論……三〇五
（一〇）三木愛花の文学論……三一一
付　論……三三
（一一）「幼稚人民を誘導する其道如何」……三三
（一二）「我国ニ自由ノ種子ヲ播殖スル一手段ハ稗史戯曲等ノ類ヲ改良ス

ルニ在リ」――政治小説論について……三三六
(一三)「政治ニ関スル稗史小説ノ必要ナルヲ論ズ」……三三五
(一四)「下等社会ヲシテ時勢ニ感動セシムルヲ要ス」……三三九
戯曲改良論……三四三
軍談講釈……三四五
(一五)赤羽万次郎の稗史小説論……三四七
(その一)「稗史講談演劇改良ノ意見」……三四八
(その二)「稗史講談演劇ノ改良ヲ論ジテ世ノ稗史講談演劇ニ従事スル者に謀ル」……三五一
(その三)「通俗政談ノ利害」……三五四
(一六)読売新聞の小説論……三五七
(一七)森田思軒の小説論……三六〇
(一八)「小説の精神を論ず」(絵入朝野新聞)……三六六
(一九)「稗史小説を論ず」(絵入朝野新聞)……三七一
(二〇)坪内逍遙の小説美術論(一)……三八〇
――『慨世士伝』のはしがき
(二一)坪内逍遙の小説美術論(二)……三九五
――『仮作物語の変遷』

(二二) 坪内逍遙の小説美術論(三) ……四〇五
——詩歌改良論
(二三) 坂崎紫瀾の小説論 ……四〇八
——写実主張の反映
(一)「小説稗史の本分を論ず」 ……四一〇
(二)「政治小説の効力」 ……四一四
(三)「東洋小説協会を設くるの議」 ……四一五
(四)「日本情史の改良を望む」 ……四一七
(二四) 和田稲積の政治小説論 ……四一九
(一)「日本の政事小説」 ……四一九
(二)「政事(治)小説の作者」 ……四二三
(二五) 坪内逍遙の小説美術論(四) ……四二四
——「小説論一斑」
附録(一) 上巻補章 ○『米国在留日本人』 ……四三五
附録(二) 下巻補章 ○『礼氏美学』について ……四四三
索 引 ……一～二〇
——人名・書名・論文・雑誌・新聞

明治初期の文学思想

下巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第二篇　明治十年以後の文学思想（つづき）

3　批評文学の要求

批評文学の形成は、近代日本文学の歴史における一つの大きな主題であり、かつそれのはっきり成長して来るのは、明治二十年以後のことで、この書物でやる叙述範囲を越えてしまうところから、この書物では、この問題を全面的にとりあげることはせず、それはそれだけ別にするという用意をして来た。しかし、上来、明治十年以後、日本文学（ひろく）の進歩を語り進むにつれ、自然にこの問題の発生にふれることにもならざるを得ないことになったので、上来語ってきた文学論の範囲の内でそれにふれることにする。もちろん文学論の中にふくめたままで叙述を進めてよいのであるが、その文学論の方がやや長くなったのに、これをそのまま入れると更に長くなり、また問題が、全体としては文学論に関連はしていても、新たに批評文学というそのあり方を打ち出すことであるから、多少叙述が混乱する恐れもなくはない。そこで、文学論につづけて、別に「批評文学の要求」という一項目を立てることにした。上に述べた通り、ここは批評文学の形成に全面的にとりかかるものではなく、文学論の発展という立場で、その要求が提唱され始めたところを、この書物の叙述範囲の年代ぎりぎりのところざっと述べるのであるから、そのつもりで受けとっていただ

くことにする。

そこで、批評文学、即ち一般にいって批評ということであるが、今ここで「批評文学の要求」といって標出しているものは、勿論西洋文学、西洋思想と大いにつながるものであるけれども、元来はこのとき西洋から始めて入って来たというものではない。批評は、一種の文学として、東洋にも日本にも、明治以前からあるものである。また明治時代にしてからが、今こうした要求が出たから、批評が出たというものではない、その前から批評がなかなか盛んになされていた。ただ、こうした文学論上、要求の公然とあげられた明治十六年乃至その前後より前と後とでは、批評の意義のつかみ方が、大げさにいうとまるでちがう。これより前は、まだ大体東洋的な考え方でそれをやっているが、これより以後は、漸く西洋的な考えに立ってそれをやるということになる。批評文学などというのは、文学観念としては、範囲や本質がはっきりしているようでいて、案外はっきりしていないものであるから、東洋的、西洋的と分けてみても、そう文字通り何処から何処までも二つに分けられるかどうか、それはむずかしいであろうが、しかし大よその根本はちがうものを示している。西洋的に批評という場合、それは、学問、思想、文明の進歩に役立つという積極的意義がある。そうしてその背後には社会進化、人間進化の原理がある。文明進歩、人間完成の考えとつながっている。つまり概していって、その役割に積極的、永久的なものがあり、そのやり方にも論理的、学問的な法則がある。ところが、東洋の批評は、それとちがって、一時的、消極的である。往々にして天才的な火花めいたものをちらつかせたものはあるが、多くは悪いものを打破する役割をするものであって、正しいもの、善いものを推し進める役割は、あまりしない。これは、進歩という根本の考えの有無につながるものであろうが、西洋には進歩の考えが中心にあり、東洋にはそれがなく、その代り循環がある。現実に照らしてどちらが人生に有難いかという議論は今別とするが、人間理想としては、いろいろな点で西洋の文明進歩、人間完成という、進歩、完成により多くの希望がもてる。まして日本を西洋的に建設し直すという大きな仕事に乗り出したばかりの明治十年代においては、将来に黄金世界を夢みる西洋風の考えが何よりも有難かったとしても、それは無理がないところである。明治も、西洋移入が年々強まって、十五年、六年たち、文学の理解も相当進んだ今となって、批評が事新しくこうした進歩の

武器として取り上げられ、「批評文学」が今更のように要求され出したのは、それに新たな西洋的意義を見出すとともに、それ以前の東洋的乃至日本的な批評に、相当強く反撥する気持があったからと見てよかろう。

東洋（今、中国で代表させる）の批評も古い。評はわかるが、批は何か。これは字義は手でうつことである。相手を平手うちにして、眼をさまさせることである。その批評は、いつごろからあるか。東洋では、一切の文化の中心を孔子におくが、その孔子の時、即ち周の時代には、もう批評が立派に出来ていた。現に孔子自身、当時の政治、文化、学問の第一流の批評家であった。孔子以後、それがますます盛んになって、春秋戦国の自由時代には、各方面にあらゆる批評家が出て、その全盛を極めた。周から秦を経て、漢になると、秦で抑えられた批評がまた盛んとなって（天下太平、自由の空気が幾分か出てきたので）政治、道徳、時局、人物、文学、その他いろいろな方面で批評家が活躍をした。賈誼、司馬遷、劉向、揚雄などという人々が、そのうちの大物といえよう。六朝に入ると、政治の乱れから、批評は人生、文学の方面に限られる有様となったが、唐に入って人生や文学ばかりでなく、政治や時局の批評も再び起り、宋、明、清と歴代それをひきついで、批評文学がなかなか盛んであり、専門の批評家というべき人物もいろいろ出た。ただ特色としては、功利を主として、主観的判断が強く、学問的な原理原則といったところがはっきりしない。しかしそれをもとめる心はあったもので、かつ一般的な漢としたものながら、人心自然の要求からくる批評原則ともいうべき概念は、一応あるにはあり、時代を背景とした正しい生き方、伝統的な道徳、人間的正義などが、その内容としてあげられよう。理想としての好い文学というものも、そうした内容とつながっていたことは、いうまでもない。しかし根本的な欠点（今からいっての）というべきは、継続的進歩という考えがはっきりしていなかったことである。

それでも、孔子以後、個々の批評家としては天才的な人物もあり、遠くは梁の劉勰、近くは清初の金聖嘆などがいる。金聖嘆は、清朝からその言動を憎まれて刑死となったので、何か特別な悪人のように受けとられているが、そんなことはない、批評家としては十分天才的な、面白い人物であった。なお普通に知られた唐宋八家のような人々も、一面では批評家として立派なものであったといえよう。こうした東洋の批評文学の一斑を知るには、林語堂の『支那言論発達史』あたりが一番手頃なもので

あろうか。

日本の批評文学を知るには、久松博士の『日本評論史』の大著があるが、これは、和歌の論が中心であって、政治や時局、思想、散文の方にはあまり及んでいないので、そこは読者自らそれぞれの書物で補う必要がある。特に漢文学の方には、そうした批評資料が沢山あるので、それを渉猟するのがよい。しかし久松博士の書物でもわかるように、日本の批評文学にもやはり一貫した進歩性が、ついに見られない。たまたま進歩の跡かと見られるものがあるが、それは、よく見ると、純粋の進歩とはいえぬもので、多くは循環的変化の現われである。日本の批評文学に進歩という分子が見えてくるのは、漢文学の影響と離れ始めた国文学勃興以後で、そうして西洋をとり入れた明治の中期、即ち二十年代に入って、その進歩というものが始めてはっきりしてくるのである。その反対に、西洋の批評文学というと、センツベリーの『批評史』、ルネ・ウェレクの『近世批評史』がともに、一貫した進歩進化の思想が中心となっていることを教えている。世界の文物が、将来は将来ほど好くなり、完全になるという考えである。それを原理原則的に証明していく、それが西洋の批評文学の中心目的になっているかと見える。東洋西洋の批評文学の差は、ただ批評文学だけでは説明しがたい問題で、歴史、思想、政治のやり方などに根本的にからまってくるものと思うが、今はそんなことは別とし、出来た批評文学を比較してみただけでも、西洋の方が比較的自由で、積極的で、文学的に独立もして、大きく発達している。善悪指摘、思想的規正は同じことであっても、西洋の方が将来に理想をおいて、大きな進歩をめざすのである。そうして論理的に、分析と綜合の方法をつかって、学問的にいく。

明治日本の批評文学も、西洋移入とともに変ってきたとはいうものの、この要求以前、即ち明治の十四、五年頃までのものは、まだ東洋的な影響を強くもっていて、新しい批評の意識にめざめているとはいいがたいものがあった。しかしさすがに、国民の思想言論の自由は、武士中心の徳川時代とは比較にならぬものがあったので、時局、政治、日本の進路などについて、批評的な言論が現われてきたが、それは長いこと忘れていた批評というものを、西洋に刺激されてやっと思い出したといった様子に見えた。勿論関心の中心は、日本の進路ということで、世界即ち西洋と日本との比較が、何かにつけてテーマの中心となったものである。そうして、比較の結果は、

大体として彼がすぐれ、我が劣るということで、そこから万事につけて革新の精神がはぐくまれていった。

具体的にいうと、明治初めの批評は、以上の彼我比較を中心にして、時局時事、政治、社会、風俗習慣などに及び、ジャーナリズムの大半は批評関係の文章で占め、批評専門の雑誌もいろいろと出た。「評論新聞」、「近事評論」、「湖海新報」、「中外評論」、「輿論新誌」、「嚶鳴雑誌」などを一応その代表的なものと見ることが出来よう。こうして実地、批評がはなはだ盛んになったわけであるが、さて問題はその批評の様相乃至調子であって、名は批評であり、形式も批評文体となっているが、その内容は、もっぱら筆者の思想感情の放出にあって、真の批評というのではない。大局からいえば、西洋をほめて我をくさすか、日本を守って西洋に反抗するか、批評の理想からいって、真の批評というものにかなり遠いものばかりであるが、殊に強いのは反官抗権の勢いのはげしさで、単に武力闘争を文筆に変えたばかりというようなものが多かった。即ち表面は西洋に習うといいつつ、実は東洋批評の遺風が強くつきまとっていたものである。具体的に時代の日常現象を論じたものでも、大体は主観的な好悪の発露であって、新日本の建設に役立つといった、確実な批評法によったものはまず少なかった。

批評文学の必要が叫ばれたのは、いわば、こうした批評混乱の最中であったと考えていただきたい。明治十五年、十六年といえば、日本文学の方向のほぼ定まった頃であり、一応中国を離れ、西洋をますます多く移入して自家革新をやりつつ、新日本建設の一翼をになっていくとなった。そのときに当って、自家革新の第一の武器であり、新日本建設を規正すべき有力な手がかりである批評が、こうした混乱した、東洋風な空気につきまとわれた慷慨悲憤の感情一点張りのものでだけあって好いということはない。ここで文学論の側から、新しく批評文学の要求が叫ばれたのは、時機にかなったものであったろう。この批評文学の要求は、つまりは批評文学の革新の要求である。このとき以前の批評を旧と呼ぶとすれば、旧批評の混沌、旧批評の東洋風、旧批評の感情論、旧批評の中国的方法（道徳批評、本文批評、独断批評など）の改正など、あらゆる面にわたっての革新を要求したものであった。そうしてその革新を実現させようという知識と信念は、西洋文学から学んだものであったことは、いうまでもなかろう。

批評は、殊に建設時代の批評は、第一に積極的でなけ

ればならぬ。一国の文明を進め、ひいては世界文明の進歩に寄与するところのあるものでなければならぬ。批評の対象を規正し、それをより好くし、将来にそれの力をのばしてやるものでなくてはならぬ。それには、まず批評家には、およそ確乎とした進歩の理想がなければならない、これがなければ規正も是正も出来ないからである。その理想とはただ主観的な好悪ではなく、彼我の将来を見通すほどの見識と学問で貫ぬかれたものであることを要する。その行き方として、建設的とはいっても、ただ対象をほめ上げるだけがよいのではない、あるときはほめ、あるときは貶する。貶するときは破壊的ともいえよう。要は批評対象の如何によるので、しかも論法は公平にやらなくてはならぬ。その建設的とは、好きものをより好くする意志からし、破壊的とは、わるきものを好く改める意志からする。そのときは、正面的に批評するのみでなく、諷刺などの技巧もつかう。批評方法としては、論理的、学問的（始め哲学的、後に科学的を唱える）にやって感情に走らない、感情論と人身攻撃は、正しい批評の敵である。

明治初めの批評は、政治、時局、時事から人物に及び、ここに漸く文学に及ぶことになったわけであるが、その文学批評も、大すじは大体以上のようなものであるとし、この頃の文学批評の目的は何かというと、それはやはり日本文学を好くし、発達させるにある。したがって、この頃の文学批評には明確な文学理想があったわけで、即ち明治以来十五、六年間に養なってきた西洋文学の知識、その知識を土台とした彼我比較の結果が、この場合文学批評の理想となっている。時代の日本文学、将来の日本文学をこの理想に導いていこうというのが、この頃の批評のさしむきの目標である。多年西洋文学から学んだものを、今や日本文学をより一層進歩させるために役立てようというのである。

こうして、この批評文学の要求は、西洋文学の知識を背景にもっているのであるが、かく公然と要求された明治十六年までに、文学論的に頭をもたげたことがあったかどうか。それは、あった。あまり沢山、度々あったということはいえないが、多少の足跡めくものは、確かにあった。そうして、それは、そういう足跡的なものにすぎなかったとしても、批評文学の公然たる要求まで来る先駆的な意義を十分示すことは示しているのである。西周の『百学聯環』、これは、前に語った通り、明治三年から五年にわたる育英舎の講義であるが、この中に文学批

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com